

## 事例 31

### タイトル:「帰ります」と、今はない生家に足を向けるAさん

#### ・ <事例の状況>

Aさんは、日中「家に帰ります。」「帰るから。」と伝えるとホームを出て、隣の地区にある生家へ足を向けて外出する。ただ、千鳥足歩行にて常に転倒の危険を伴うため、外出中は「近隣に用事があるので」と同行するようにしている。後方に職員が位置することで、気を遣うため、斜め前方を歩くようにしている。途中、買い物をしよとしたり、大通りを横断しよとしたり、近隣からの支援や同行職員の支援を必要としている。生家までたどり着くと、「あら。」「あら。」と、表情を硬くしながら歩き回り、「留守だった。」と同行した職員に話すなどして、ホームに戻る。途中、膝が伸びない状況で歩行しているため、疲労が溜まり疲れて座ってしまう。ホームに戻ると「頭のなかがグシャグシャになった。」など、混乱の様子が見られる。また、足の痛みについて、認識ができず、職員に不満を訴えることもある。

#### ・ <この事例で課題と感じている点>

常に目が離せない状況である。職員もどう対応して良いか不安になる状況もうかがえる。転倒事故。夜勤帯等職員が1人体制であるときにどう対応したらいいのか。

#### ・ <キーワード>

帰宅を訴える 道路横断 転倒 支援拒否

#### ・ <事例概要>

【年齢】 80歳代前半

【性別】 女性

【職歴】 金融機関勤務

【家族構成】 一人暮らし

【認知機能】 HDS - R 6点

【要介護状態区分】 要介護3

【認知症高齢者の日常生活自立度】 a

【既往歴】 なし

【現病】 アルツハイマー型認知症、高脂血症、便秘症

【服用薬】 高脂血症治療薬(リパロ) 消化性潰瘍治療薬(酸化マグネシウム)

認知症改善薬(アリセプト) 抗不安剤(ワイパックス)

【コミュニケーション能力】 「仕事に行く」「家に帰る」「親類の家に行く」など自分の想いを訴えることはできるが、長い話になると会話の内容が繋がらなくなり、内容を共有することが難しくなる

【性格・気質】 几帳面 まじめ 心配性 熱心

【A D L】 排泄時失敗が多く、介助が必要。入浴、脱衣などは段取りが掴めず随時声掛け支援が必要になる。食事は自立。歩行は見守りが必要。

【障害老人自立度】 A

【生きがい・趣味】 洋裁、和裁をしていた。買い物や外出が好き。

【生活歴】 市内生まれ。洋裁・和裁の学校で洋裁・和裁を習う。金融機関に勤務、結婚後も嘱託で勤務していた。2女をもうけ、長女は近くに住んでいる。70歳代半ばから会計をせず、商品を持ち帰ろうとして警察に通報されることがあり、70歳代後半からは親戚の家を忘れたり、同じ物を買ってきたりすることがあり、また亡くなった夫は仕事に行っているとか、出勤中だと話すようになった。長女の夫は要介護状態で、Aさんは「嫁に出したのだから世話にならない(なれない?)」と話していた。

【人間関係】 一人暮らしの生活時には、長女、ケアマネジャーなどの介入も拒否しており、訪問や通所のサービス利用も進まなかった。何事も自分で行わなければいけないという気持ちが強く、人と接する機会が少ない。友人や知人との接点もほとんどない状況である。

【本人の意向】 自宅に誰もいないが留守番をしなくてはならない

【事例の発生場所】 グループホーム